

こらっせ便り

2022年9月26日



【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>

「福島リフレッシュプログラム」が無事終了

福島子ども・こらっせ神奈川事務局長 遠野はるひ

夏のプログラム、「福島リフレッシュプログラム」と「福島応援・スタディツアー」が、無事に終了しました。3年ぶりのリフレッシュプログラムで、しかも福島では初めての開催です。福島の方々の行き届いたサポートに深く感謝いたします。

「福島リフレッシュプログラム」は8月18日、9月3日と2回、どちらも福島市から車で1時間、裏磐梯の檜原湖畔にある松原キャンプ場で開催されました。1888年に磐梯山の頂上が水蒸気爆発で崩落し、川をせきとめ多数の湖や沼ができましたが、檜原湖はその中でも最も大きい湖です。午前中はハイキングをしながら自然観察指導員の土屋勇輝さんから生息する動物、植物、湖沼の説明を受け、昼食後はカヌーに乗りました。子どもたちは上手にパドルを操り、遠くまで漕いでいきます。全員が楽しかったという感想ですが、カヌーが一番人気。「こらっせユース」にも子どもと触れ合う喜びをもたらしてくれたようです。

「スタディツアー（福島市・飯舘村）」は、2回のリフレッシュプログラムの前日8月17日と9月2日にそれぞれ実施しました。ユースは飯舘村、福島市内で11年後の今もなお残る原発事故の足跡をたどり、放射線の測定もしました。夕方には児童施設を訪ね、施設の案内をしていただき、子どもたちと一緒に遊びました。このような事前交流があったこともあり、翌日の「福島リフレッシュプログラム」はスムーズに進みました。

8月17～18日の「応援・スタディツアー（檜葉町）」は、この4月に新設された教育委員会が運営する「学校地域協働センター」のプログラムをお手伝いし、その合間にスタディツアーをするというスケジュールでした。檜葉は福島第一原発に近いこともあり、資料館・遺構なども多く、学ぶところがたくさんあります。檜葉での最後の「学び」は、語り部・高原カネ子さんから。高原さんのお話は興味深く、帰りの列車にもう少しで乗り遅れるほどでした。

2020年、21年と2年間、プログラムを実施していなかったにもかかわらず、今回多数のみなさまから再び賛同をいただきました。「こらっせ」の活動は、賛同してくださっている、協力してくださっているみなさまがあってこそ継続が可能です。ありがとうございます！

福島リフレッシュプログラム 8月18日

森にこだまする子どもの歓声

バスレク 自己紹介の内容でクイズ

行きのバスの中では「こらっせユース」が考えたバスレクを行いました。バスレクの内容は自己紹介となぞなど。自己紹介では一人一人に名前・学年・好きな食べ物・得意なこと・今日楽しみなことを話してもらいました。子ども達は緊張しながらも一生懸命話してくれました。

その後、自己紹介で答えてもらった内容で、人当てクイズをしました。「答えが分かる人！」と聞くと、手を上げて答えてくれました。

最後はなぞなぞです。前の晩、「こらっせユース」で考えました。小学生や中学生に合った問題を作るのが難しかったです。

帰りのバスでは参加者全員にリフレッシュプログラムの感想を聞きました。楽しかった、という感想を多く聞くことができ嬉しかったです。(小林真子)

火をおこして焼きそば作り

桧原湖のすぐ近くにある松原キャンプ場に到着、午前中は周辺のハイキングです。雨が降り始めたのですが、いざ森の中へ。

道の途中で背丈の高い、葉っぱが枯れたような植物を発見。それはウバユリという植物で、葉っぱが枯れたような状態で生えているので「姥百合(うばゆり)」と名付けられたそうです。

キャンプ場では、子どもも協力して準備。まずは火を起こします。焼き野菜と焼きそばを作りました。こんがり焼けた野菜は香ばしく、噛みごたえもあり美味しくいただきました。焼きそばも、麺とソースがよく絡み、野菜の味も出ていて美味しかったです。(井手美由希)



湖水浴、バシャバシャタイム

午後はカヌー体験です。みんな仲良く水着に着替え、ライフジャケットをつけました。乗る時にペアをつくるのですが、子どもたちから一緒に乗ろうと誘って来て嬉しかったです。

私のカヌーはペアの子と息ぴったり。「いちに、いちに」の掛け声のもと、ぐんぐん漕いでいました。みんな上手で特に男の子は早くて選手のように見えました。

カヌーの後は湖水浴です。子どもだけのバシャバシャタイムが始まります。ターザンのように綱につかまって水に飛び込んだり、滑り台に乗って水に落ちる子もいました。改めて子どもたちのパワーに圧倒されました。(樋口優奈)

福島リフレッシュプログラム 9月3日

初めてのカヌー体験

神秘的な五色沼を巡るハイキング

裏磐梯での最初のプログラムは五色沼を巡るハイキングです。到着すると自然観察指導員さんが、五色沼周辺は国立公園内の特別保護地区に指定されているため一切の動植物の採集が禁じられていること、ツキノワグマの生息地であること等の注意点についてお話がありました。

ハイキングコースは森の中に作られていて、木の幹や小川をよく観察し、生き物を探している子どももいました。指導員さんによると、五色沼は磐梯山頂が水蒸気爆発によって山体崩壊を起こし、岩なだれが川をせき止めたことで形成されたそうです。そのため地面には多くの岩石があり、石を避けて慎重に歩く子もいれば、石から石に飛び移りゲームをして楽しんでいる子もいました。

五色沼は森の中に点在していて、沼に着くと景色が開けてその沼を一望できます。山の中に突然現れる沼が神秘的に感じられました。五色沼は沼によってエメラルドグリーン、コバルトブルー、ターコイズブルー…と色が異なります。

ハイキングのゴール直後も子どもたちは疲れた様子はなく、「早くご飯にしよう!」と元気いっぱいでした。帰りのバスでは、子どもたちから「ハイキングが楽しかった」「五色沼がきれいだった」という声があがりました。(山藤花奈)

びしょ濡れで楽しむカヌー

再びバスに乗って桧原湖に向かいました。湖岸に着くと、そこからボートに乗ってキャンプ場のある対岸の方へ行きました。キャンプ場でお昼ご飯を食べました。焼きそばを作り、それを子どもたちと楽しく食事することができました。

食後はカヌー体験です。ライフジャケットを着用し、カヌーの漕ぎ方についての講習を受けて、そのあと子どもと大人で2人組になってカヌー体験をしました。2人組を作るときにある子が僕に向かって、一緒にやろうと言ってくれたのがうれしかった。

何回も他のカヌーにぶつかりましたが、その都度子どもは面白そうに笑っていました。岸に戻り、今度は子ども同士でカヌーに乗って、再び沖に出て楽しんでいました。



キャンプ場に戻ると、ズボンがびしょびしょになっていることに気づきました。キャンプ場スタッフの方が、たき火を炊いてくれたのでズボンを乾かしながら、焚火でマシュマロと桃を串刺しにして焼いたものを食べていました。(近藤俊輔)

(8月17-18)、9月2日)

檜葉、福島市・飯舘村でスタディツアー 肌で知る震災のこと、原発のこと

8月17日、18日 檜葉応援・スタディツアー

印象に残った小学生の日記

17日午後は、二つのコースに分かれました。私は震災伝承施設アーカイブ・ミュージアムを見学しました。印象に残ったのは、震災当時小学校5年生の女の子が書いた日記です。食べ物がなかなか手に入らなかったことや水が出なかったこと、避難先を転々としたことなどが記されていました。私は現在、小学校で教えています。防災訓練の際に東日本大震災のこと、復興のことを子どもたちに話します。彼らにとっては、震災も原発事故も生まれる前の話です。経験したこと、被災地に行って見聞きしたことを次の世代に伝えていきたいと思います。(和泉百香)

高原さんの話に衝撃

17日、檜葉町にある檜葉っ子教室で小学生と水遊びをしました。水鉄砲、水風船の攻撃も受けながら子どもたちと一緒に走り回りとても楽しかったです。

18日、語り部である高原カネ子さんから東日本大震災の経験談を聞かせていただきました。高原さんの話には衝撃を受けました。避難所を転々としたことや、引っ越した先であまり良い目で見られないことなどです。(河野みずき)

子どもたちと温泉場の清掃

18日は檜葉町の子どもたちと一緒に天神岬の温泉場の清掃をしました。男子と女子に分かれてスポンジやたわしを使い温泉の隅から隅まで磨きました。太平洋を一望できる景色を見ながら温泉を磨くことができました。(神崎文花)

8月17日と9月2日は飯舘村へ

最初の目的地は、飯舘村にある幼小中学校です。学校近くの駐車場で降り、吉野さんのホットスポットファインダーで測定してみると、地表に近づくほど線量は高くなりました。これは地表に沈着した放射性物質を測定できるからです。数値が最も高い場所は、歩道のひび割れ部分でした。放射性物質に汚染されやすい土が、ひび割れ部分に溜まるためだそうです。(山藤花奈)

「スーパーいちい」の棚

9月2日、道の駅でお昼ご飯を終えた後、「スーパーいちい」に向かいました。棚に障害者福祉施設が作っている「いきいき！ふくしまマーケット」と銘打たれた商品が置いてありました。案内人の吉野さんが、スーパーいちいの社長に相談、手数料なしで商品を置くことを快く承諾してくれたそうです。社長の器の大きさに感心しました。(近藤俊輔)

広大な土地に太陽光パネル

計測後は再び車に乗って太陽光パネルを見学しました。広大な土地に太陽光パネルが敷き詰められていました。原子力発電の事故で被害を受けたからこそ、太陽光発電という自然エネルギーを使おうとする工夫がありました。太陽光パネルは10年に一回は交換が必要です。その手間をかけてでも自然のエネルギーを使う覚悟が感じられました。(樋口優奈)